

熊本城 復興に向けて

〈5〉神風連の変と鎮台の被災

鎮台(陸軍)の本営が熊本に置かれて以来、熊本城は陸軍の管轄地として大きく改変されていきました。江戸時代、藩校時習館や武家屋敷が建ち並んでいた二の丸では、明治4(1871)年3月には兵隊の操練場とするため建物の解体が決定され、兵舎の建設が進みました。兵舎の設計は、フランスの工兵大尉ジュールダンが担当し、現在の二の丸広場の周囲をぐるりと取り囲むように、二階建ての兵舎十数棟が建築され、歩兵十三連隊の兵営※¹となりました。明治7(1874)年頃に天守から撮影された写真では、宇土櫓越しに洋式兵舎の白い建物が見えます。

さて、鎮台の設置により熊本でも近代的な軍制が整えられていく一方で、政府の近代化政策に不満をもつ士族たちもいました。その一派に、熊本の国学者林校園の教えを学んだ士族の集団である神風連(敬神党)があります。彼らの多くは熊本県令安岡良亮のもとで、県内各地の神社の祠官(神官)を勤めていました。明治9(1876)年に廃刀令・断髪令が出されると、彼らはこれに反発して「宇気比」(物事の可否を神にはかる、一種の占い)を行い、その結果拳兵を決定しました。そして10月24日深夜、太田黒伴雄が率いる神風連のメンバーおよそ170人は、甲冑や刀・槍・長刀などの装備で集合し藤崎宮に祈願した後、3つの部隊に分かれ、安岡県令・熊本鎮台司令長官種田政明・同参謀長陸軍中佐高島茂徳などの要人、歩兵十三連隊兵営、砲兵第六大隊兵営(現在の桜の馬場城彩苑)を襲撃しました。深夜の突然の襲撃に、種田司令長官や高島参謀長はその場で斬殺され、重傷を負った安岡県令は襲撃の3日後に死亡しました。また、砲兵第六大隊の兵舎はすべて炎上し、歩兵第十三連隊の兵営は北側の第二大隊の兵舎を中心に、米庫や賄所(台所)まで焼失しました。

鎮台に甚大な被害を与えた神風連でしたが、その後、鎮台兵の銃



▲明治7年頃の二の丸歩兵営
(公益財団法人文化財建造物
保存技術協会 提供)



焼失した兵舎を赤く着色した
「熊本鎮台敷地図」(熊本博物館所蔵)▶

などによる反撃にあい、副将の加屋霽堅が歩兵営で戦死、主将の太田黒も法華坂に退却したところで死亡し、翌朝には収束に向かいます。神風連側は30人近くが戦死したほか、80人あまりが退却後に自刃(自殺)し、また、鎮台側の死傷者は200人を超えました。

神風連の変の後、鎮台ではすでに決定していた野砲兵営(現旧細川刑部邸)の建設を見合わせ、焼失した兵営の復旧に取り掛かります。しかし、急襲を受けた鎮台兵のダメージは大きく、士気の回復に時間がかかっていました。そして神風連の変からわずか4か月後、熊本城はさらに大きな戦いの舞台となっていきます。

※1 兵営 …… 連隊(大隊)ごとに設けた、兵士が居住する建物のある一定区域や兵隊屋敷。